

「矢祭子ども司書」の皆さんへ

子ども司書の認定を受けられた十九名の小学生の皆さん、一年間にわたって、十二回にわたる特別の講座を受けられて、いかがでしたか？

みなさんが、もし司書の仕事を学ばなかったら、学校の図書室やもったいない図書館で、本を借りて読むだけで、小学校を卒業してしまうことになったでしょう。しかし、皆さんは、図書館に勤めている人が本の内容によって、きちんと分類して、利用する人が本を探すのをお手伝いしたり、子どもたちを対象に読み聞かせの会をしたり、俳句スクールを開いたりするなど、いろいろなことをしているのを学んだわけですね。

そして、本を貸し出す人の側に立って、図書館を眺めてみると、本にはほんとうにいろいろな種のものがあるのを知って驚いたでしょうし、これまでよりずっと本に親しみを感ずるようになったことでしょう。本の全体を見る目を持てるようになったわけですから、そういうのを「視野が広がった」と言います。

どんなことでも、自分に必要なことを利用するだけでなく、サービスをしてくれる側になって物事を見ると、社会を見る目がどんどん広がっていきます。

みなさんが図書館について学んだことは、社会を見る目を開く、とても貴重な一歩にもなったのです。とくに本の世界を見る目が広がったことは、一生を通じて役に立つ心の財産になるに違いありません。

本に親しみを持ち、大人になっても本を読むのが好きな人は、ものを感じる感性がいつまでも衰えないで、心の豊かな人生を送ることができるようになります。皆さん、この一年間に学んだことを振り返って、忘れないようにしてください。

子ども司書という学びは、ほかの町や村では、全国を見渡しても、ほとんど取り組んでいません。皆さん、矢祭町の小学生でよかったですね。大きくなったら、学校での読み聞かせのボランティアやもったいない図書館のお手伝いをするボランティアの活動をしてください。そして、いつまでも本を愛して下さい。

今日をそういう人生を目指すスタートの日と考えましょう。

平成二十三年二月二十日

ノンフィクション作家

柳田 邦男